

タイトル名「対人援助実践をレポートするこの一冊」

第38回：第4章-その10-

その人を支えるために、 ワタシは、どこまでひたむきになれるのか？

著：渡辺修宏
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

なぜ他者を支えようとするのか？

すべからく、対人援助に関わっている方々は、

「誰かの役に立ちたい」とか

「人に喜ばれるような仕事をしたい」とか

「人の支えになりたい」とか

そんなことを、1度や2度は当たり前に、嘔み締めているのではないだろうか。

いやむしろ、そんな美辞麗句には抵抗を示す方もいるだろうが、そうであっても

「他者とかかわることを通じて学びたい」とか

「結果的に自分を高めたい」とか

「ともに成長していきたい」とかを、少しは考えたことはあるだろう。

医療、保健、福祉、保育、療育、教育、その他さまざまな領域の違いはあっても、結局どこかで、人の支えになることに対する、確固たる信念や哲学のようなものを、いくばくか、自身の胸に秘めているのではないだろうか。

かくゆう私も、きっと、そんな人達の一人だったと思う。

思い出す、あの人のことを

そんな前提を踏まえて上、今回、読者の皆様に一読を強くおすすめしたいのが、「たかの歩」作の、『さくらと介護とオニオカメ！』（マイクロマガジン社 コミック ELMO）である。ずばり、介護福祉職らのマンガである。

介護、看護、福祉に興味ある方はもちろん、そういったケアに興味がなくとも、広くヒューマンサービスに関わる方には必読とっていい「名作」である。私がそう、保証致し

ます。間違えなく名作であり秀作であり、きっといつか、ドラマ化や映画化をすると確信している。

さて、ネタバレを避けるために、「さくらと介護とオニオカメ！」の内容についてはあまり触れないが、少しだけ個人的なことを述べさせていただきたい。

実は私には、何名かの、尊敬する介護福祉士らがいる。

そう、かつて一緒に働かせていただいた、諸先輩方の何名かである。

それはもう、本当にすばらしい諸先輩方がいて、介護技術はもちろん、患者や利用者の方々に触れ合うコミュニケーション技術も巧みで、なによりも人間としての感性が豊かで、繊細で、とにかく人として尊敬できる方々であった。

若き頃の私は、そういった偉大な諸先輩方の姿を近くや遠くからみて、必死になって「彼らに追いつきたい」ともがいたり、あるいは、「とても追いつけない」と落胆したりしたものである。そう、彼らの仕事の高いスキル、見事な所作・立ち振舞い、あふれる優しさや人間性は、私にとってのお手本であり、目標となってくれていたのである。

『さくらと介護とオニオカメ！』を読むと、そんな諸先輩方の一人を思い出す。

その方、Aさんは、私の1つか2つ年上で、明るくて、エネルギッシュで、行動力があって、発想力があって…、とにかくいつも、私の想像以上の仕事をこなす、才女であった。

さまざまな仕事において、彼女がどのようにそれをこなすかを傍目で見ると、ひどく勉強になった。彼女の仕事ぶりに注視していると、「そんなやり方があったんだ」とか、「ああ、それも面白いやり方だ」と、いつもうなされたからだ。なによりもAさんは、「みんなが喜ぶ方法」や、「みんなが笑顔になる方法」を選びがちだった。またそこにも、感銘を受けた。つまり、「効率がいいから」とか「楽なやり方」ではなくて、かかわる方々が「楽しく」、「笑える」、「明るい気持ちになれる」ようなやり方を選ぶのが、Aさんの発想であり行動だったのだ。

当然、彼女に注目するのは私だけではなかった。ほぼすべての同僚が、もちろん、患者や利用者の方々、そしてそのご家族など、多くの方々がAさんの仕事ぶりを認めて、頼っていたと思う。少なくとも、私はそのような空気を肌で感じていた。

当時、私はいつも、「Aさんだったら、この仕事、どうやるかな」と意識して、仕事に励むことが多かった。Aさんからたくさんのことを学びたいと思っていた。

ただ、私がAさんと仕事でかかわりを持てる機会は非常に乏しかったし、また、ひどく残念ながら、Aさんは病に患い、職場から離脱することになってしまったのであった。

Aさんを追いかけて

Aさんと私の関係は、広い意味での同僚であったが、同じ部署で業務にあたる期間自体はひどく短かったので、そう、親しい間柄とはいえなかった。だが、上でも述べたように、部署が同じであろうがなかろうが、私はAさんの仕事ぶりに注目していた。実際、私がどこにしようが関係なく、Aさんの仕事ぶりから学ぶべきことは多かったことである。そして私は、そういった意味でAさんを尊敬していた。

そして、Aさんが入院したと聞いた時、私はお見舞いに行きたくなった。

Aさんの早い職場復帰を願っていたし、また、こういった機会に、Aさんといろいろな仕事の話をしたかったからだ。正直、なぜAさんが普段、あれほど素晴らしく働けるのか、いろいろとその理由というか、秘密というか、コツなりを、直接聞いてみたいという気持ちもあった。

ただ、気軽にお見舞いにいける間柄ではないと感じていたので、すごくためらった。

個人的に親しいわけでもない。当時、同じ部署にいたわけでもない。

異性ということもあり、また、お互い独身だったから、変に気を遣って、ひどく足が重かった。

でも、結局、私は、お見舞いにいった。

Aさんは、私の来院にひどくびっくりしていた。当然だろう。

お互い、ぎこちなく、大した話はできなかった。

私が勝手にAさんを尊敬しているのであって、そんな私の気持ちなぞ、Aさんはツユも知らなかったはずだし、とにかく、変な空気になってしまった。

当たり障りのない話しかできなかった。Aさんの仕事観などを軽く聞いたけど、「ただ、普通に働いているだけだよ」と、あっさり一蹴されてしまった。

私は、たしか花束を渡し、「早く職場復帰してくださいね。みんな、待ってますよ」と言って、退室した。

それが、Aさんと会った、最後の場面となった。

Aさんは、病気が悪化して、まもなくして、亡くなったのだ。

Aさんの幻影を感じて

あまりにも早く、あまりにも惜しい人をなくして、私はひどくショックを受けた。

あんなに仕事ができる人は、そういない。

しかも、仕事を通して、周囲を和ませたり、癒したり、笑わせたりできる人だった。

本当に尊敬に値する人だった。素敵な人だった。

悲しんだのは私だけではない。同僚が、患者や利用者の方々が、嘆き悲しんだ。

Aさんを、仕事の目標やモデルにしている人は私だけではなかったことがその時わかった。多くの後輩たちが、Aさんから多くを学び、Aさんに近づこうと、Aさんの目標にし

ていたことを知ったのだ。ある意味、当たり前だな、と思った。

Aさんが亡くなってから改めて感じたことは、Aさん以上に素晴らしく、魅力的に仕事をこなす人とはそうそう簡単に出会えることではないということであった。

もちろん、Aさん以外にも、素晴らしく魅力な方はごまんという。実際、そういった方々と何名も出会って、私はたくさんの尊敬と感謝を感じてきた。ただ、そうであっても、Aさんは無二の存在であり、代わりはいないということである。

記憶の中のAさんを思い出しながら、ふと、仕事の工夫を考えることがある。もうすでに、Aさんと最後に会ってから、20年以上、経つというのに。

そう、私はまだ、Aさんに追いついていない。

いまだにAさんは、私の先の先に行っている。本当にすごいことである。

現在私は、仕事柄、介護福祉士のタマゴたちと関わりを持つことがあるのだが、そんな若い、未来あるケアワーカーらに、Aさんの凄さ、偉大さを伝えきれなくて、じれったい想いを持っている。

対人援助は、やれ技術だ、やれ制度利用だ、やれ人間性だ感性だというけれど、そんな簡単にまとめられたり、くくれたりできる世界だけではあrawしきれないという思いに、駆られる。うまく言えない自分に気づく。いまだ、未熟な自分に気付かされて、Aさんの後輩として、本当に恥ずかしくなる。

いったい俺は、Aさんから、何を学んだというのだろうか。

何を学んだと、いえるのだろうか。

Aさんを慕う後輩を自認するくせに、どうしてこうも、だらしのないのだろうか。

泣けてくる。

私はまだ、覚えているのである。Aさんの援助を受けて、本当に喜んで、笑顔になって、満足して生活されていた患者や利用者の方々の姿を。あの日々を。

『さくらと介護とオニオカメ！』でみるAさん

『さくらと介護とオニオカメ！』を読むと、あくる日のAさんの姿を思い出す。

この作品には、かつて私の先輩として、素晴らしい仕事をしてくれたAさんの、片鱗を思い出させてくれるシーンが盛りだくさんなのだ。

おそらく、これは私の勝手な想像だが、『さくらと介護とオニオカメ！』の作者もまた、「私にとってのAさん」と、出会っていたのだろう。あるいは、作者自身が「Aさん」だったのかもしれない。

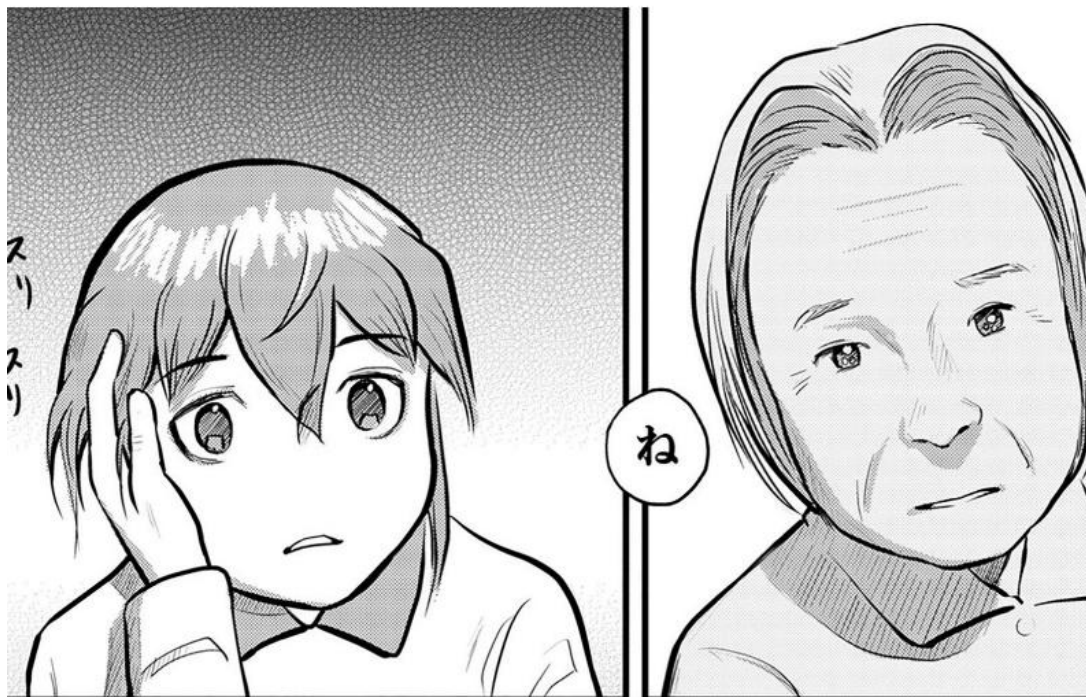
はっきりいって、そして失礼ながら、本音をぶちまけてしまうが、対人援助の臨床を知らない者なら、この作品を書けるわけがないと思う。

無論、マンガであり、エンターテインメントだから、すべてのシーンが現実的というわけではないが、『さくらと介護とオニオカメ！』の作者には、様々な臨床経験なり、それに

近い体験が多くあるのだろうと思う。

そして、Aさんに憧れ、Aさんを追いかけた私と同じように、『さくらと介護とオニオカメ!』の作者もまた、対人援助臨床についてさまざまな想いを積み重ね、見事、このような作品を生み出してくれたのだと思う。

くどいようだが、これはあくまで、私の想像である。いつか機会にめぐまれたら、たかの歩先生に、いろいろ聞いてみたいものである。



©たかの歩 ©マイクロマガジン社

さて、最後に、少しだけ、『さくらと介護とオニオカメ!』の内容に触れて、ペンを置くこととする。

この作品では、「支えているのは私」であったはずなのに、いつしか、「支えられてるのが自分」と気付かされるシーンが登場する。

賢明な読者は、この一文に、「…はっ」とさせられるだろう。

保育者が児童と向き合うことを通じて。

教育者が生徒と向き合うことを通じて。

その他、あらゆる援助者が、その対象者と向き合うことを通じて、いろいろ教えられたり、支えられたり、存在を受け入れてもらうことがあるだろう。誰しも、そのような経験を、1度や2度は、重ねてきたことだろう。そんな関係性の中で、極めて多面的に、援助がなされるのである。その営みに、援助者、被援助者という属性を意識する必要性はほぼなく、ただ、個々にひたむきに、自分にできることを、ただ、するのである。

別に、美辞麗句を述べたいわけではない。

ただどこかで、まだ、私は、Aさんの背中を追いかけていて、あんな素敵な対人援助職者になりたい、ありたいと、求めているのである。

人を支えることに純粋になれたら、どれほど楽になるだろうとも、考えることがある。純粋になれたら、ひたむきになれたら、きっとある意味、悩むことはない。

いやいやもちろん、「どんな援助をすればいいのか」だとか、「どこまで援助をすべきだろうか」という自問自答は、とめどめないのだろうけど、それでも、「どうして援助しなければならないのだろう」とか、あるいは、「どうしてそこまで援助しなければならないだろう」というためらいや迷いは、ほぼ、無くなるんじゃないだろうか。

果たしてこれは、単なる理想論なのか。

さらに考察を続けたい。Aさんの姿を追いかけてながら。

—つづく—